

能楽雑感から その7

希曲のこと、舞台での居住まい

～ 希曲のこと ～

以前、小欄で予告したのですが、4月19日に、横浜能楽堂・第二舞台で研究会を開催します。「稀曲・難曲特集」をテーマとし、番組づくりを開始致しました。具体的には、あくまでも私的な見解に基づく選択ですが、稀曲として、「玉井」、「知章」、「胡蝶」、「吉野静」、「住吉詣」、「昭君」の6番、難曲としては、「船橋」、「朝長」の2番を選びました。

それぞれに、面白味があると思うのですが、これらの曲が会などで、素謡としてあまり掲出されないのは、不思議でもあり、残念なことです。

難曲のことは、別の機会に書くことにして、稀曲とされる曲が、何故に稀曲になっているのか、その理由は四つほどあると思います。

- ① その最たるものは、謡としての面白さよりも、能としての面白さに欠けることに起因するように思えてなりません。演能の機会が少ないほど、親しみが湧かず、素謡として謡ってみようという気にならないからです。

「初番物」の多くが、謡としてはあまり面白くないでも、能となると概ね面白いことと裏腹の現象と言っても良いかもしれません。

- ② 二つ目は、短過ぎて、素謡会の番組に入れ難い曲です。鶴亀や、猩々や土蜘蛛などは短い曲ですが、能では良く演じられるので、素謡会でも間々掲出されています。

「枕慈童」とか「皇帝」などがその類でしょうか。「合浦」などは、小品でも結構面白く、私が最初に師匠に謡の手ほどきをして貰ったのもこの曲ですが、謡会ではついぞお目にかかったことがありません。

- ③ 三つ目は、逆に長過ぎるもの。曲が長いと、番組を作成する立場からすると、謡としては面白味があっても、つい敬遠したくなります。ましてや、冗長の嫌いのあるものは掲出されることが少ないようです。

「蘆刈」や「櫻川」などは、長くても筋だてや詞章が素晴らしいので、掲出頻度はそれほど低くありませんし、「安宅」、「攝待」、「柏崎」なども、ドラマ性と謡の技法面で面白さがある故に、稀曲の範疇には入らないのではないかと思います。が、「春栄」とか「藍染川」とかになると、ぐっと、掲出頻度が低くなります。

- ④ 四つ目は、筋書きに難があったり、曲趣が今の時代に合わないものです。その典型的なものは「仲光」とか「楠露」で、50年近い白謡会の歴史のなかでも、一度も番組に登場したことがありません。

このジャンルに些か近いと言える「夜討曾我」とか「七騎落」は、ご当地ソングでもあるところから、2度ほど掲出しています。

～ 希曲のこと (2) ～

観世流百番集と言う、合本があります。私はこれまでに、3回買い換えましたが、最初のものは昭和37年に求めたものです。余りにもボロボロの体裁になってしまっているので、かえって

愛着が湧き、処分しないで書架に置いてあります。

百番集の謡は全て大成版なので、冒頭に大成版の由来を記した、ちょっと大げさな文言（初心者用五番本の上巻にも）が書いてあって、これに。時折目を留めては、この道の先人達のご努力を偲んでいます。

前置きが長くなりましたが、ご承知の通り、百番集は正、続の2冊で構成されていますが、この続編に収録されているのが、所謂、稀曲の部類に属すると考えて良いでしょう。

しかし、正編に収録されている曲はともかく、続編だからといって、簡単に稀曲と言って片づける訳にはいきません。以下のような観点から、続編掲載の曲にも親しんでおきたいものです。

① 名曲と言って良いもの（あくまでも私見ですが…）

例えば、「求塚」を筆頭に、「雨月」、「采女」、「誓願寺」など。

因みに「求塚」が最後に編集されているのは、復活曲だからでしょう。同じ類の「三山」は、私の百番集には収録されていません。（最近はどうなのかは未調査です）

ついでながら「蟬丸」が正編の最後に収録されているのも、些か似たような理由によります。

② 難しい曲であるが故に、マスターしておきたいもの

例えば、「通盛」は所謂「三盛」の一つで、同時に、名曲でもあります。また、「白髭」は「三クセ」の一つ。「船橋」、「咸陽宮（琴之段）」、「春日龍神」なども、克服しておくべき難曲です。

③ 他の曲と関連付けて、承知しておきたい曲

例えば、「攝待」と「忠信」は「屋島」との関連、「夕顔」と「浮舟」は「玉鬘」との関わり、「知章」は「大原御幸」とのつながり、などなど。

④ 仕舞では極めてポピュラーである曲

例えば、「難波」、「道明寺」、「鶴」、「大江山」など。

食わず嫌いにならないで、所謂稀曲とされる本に挑戦してみると、意外に新鮮な発見があるようです。

私の知っている、某同好会では、「続百番集」を順を追って謡っています。

～ 舞台での居住まい ～

仕舞の始まりは、切戸口からと言うことは常識ですが、謡でも舞台上がって謡う時は同じことが言えます。以下は時々見受けられる、好ましくない型（パターン）です。

①切戸口から現れた途端、自分の行き処が分からなくて、うろうろ、きょろきょろする「失せもの尋ね人型」

②見台の前に就いた後で、隣のお役の人と何やらひそひそ話をする「ご近所仲良し型」

③謡いを間違えた途端に、照れ笑いしたり、ときには頭を搔いたりする「お笑い芸人型」（仕舞でも多い）

④謡を間違えたことに気がついて、もう一度、元に戻って繰り返す「念仏和尚型」（会では厳禁）

⑤謡ながら、左手で拍子を取り、膝を叩いたり、右手の扇を上下に揺らしたりする「ドラマ

一型」

- ⑥前項の型が昂じて、両手を動かし、更には顔までも動かす「ちんどん屋型」
- ⑦謡ながら顔の表情が微妙にかわる「百面相型」。これが著しくなると、特に、「入り」とか「入り回し」、一番多いのが「甲ぐり」の時ですが、顔をくねらせる「文楽人形型」
- ⑧絶句したり、読み違いをして訳が分からなくなったお役の人に対して、隣の役の人が、あれこれお節介を焼く「家庭教師型」（こういう時は地頭が対処すべきものです）
- ⑨自分の謡っていないときに、とにかく落ち着きがない、眼もきょろきょろする「空き巢泥棒型」
- ⑩ページを捲る際に、いちいち指を舐める「調理師型」
- ⑪一曲を謡い終わってから、観客に頭を下げる「落語家型」（独吟に多い。気持ちは分かるけど・・・）
- ⑫退場するとき、足がしびれて動けなくなり、一人だけ舞台に取り残される「ロビンソン・クルーソー型」（こういう時は周りの人が助けましょう）
- ⑬入場・退場時、一人だけ突出して（ワキ、ワキツレの人）が先に出てしまい、後続の人が大幅に送れてしまう「独武者型」

心得るべきは、舞台上がっての謡は、観客を楽しませたり、笑わせたりすることが目的ではなくて、観客に感動を与えようと努めることが基本です。たとえそれが空しい努力であると分かっている・・・

～ 舞台での居住まい（2） ～

研究会での参加者が52人と、この会での過去最多の会が、先週土曜日に催されました。

通常、研究会においては、私はあまり地謡に参加せず、皆さんの出来栄を愛でる役割を楽しんでいます。この日も、素謡8番のうち7番を見所で鑑賞させていただきました。そこで気が付いたことは、舞台での居住まいがもう少し何とかならないものかということでした。

以前、小欄でこのことについて、専ら、個人の居住まいについて書かせてもらいましたが、今回は「集団での居住まい」について書かせてもらいます。

研究会は内輪の会ですから、まだ良いのですが、春・秋の会とか、地方舞台での別会ときは、見所に思いがけない能楽通の方が来ておられますので、敢えて申し上げることにします。

その①～入場の仕方

整然とあって欲しいものです。左から順番に座を占める決まりですが、舞台上がってから、キョロキョロと自分の坐る場所を探したりする人を多く見かけます。また、地謡が2列以上に重なる場合は自分が何列目になるかをわきまえておきましょう。

人数が多いときは、地頭が切戸口の前で整理しなくてはなりません。着座した後で、地謡のすわり位置が歪んでいたり、バランスを欠くときは地頭が指し図して、座り位置を整えます。

今回、連吟のときに、思いもよらぬことが再三にわたって起きてしまいました。つまり、連吟のお役の方だけが舞台上がり、謡い始めても、地謡が出てこなかったのです。これは、言うならば、2階にお客様を上げておいて階段を外すようなものです。

その②～扇の扱い

舞台上に着座したら、すぐに扇を右膝に沿っておきますが、これを膝の前にずらす動作が、いつもそうなのですが、バラバラです。お役の人は、シテに合わせること。

後ろの地謡は、シテの動きが分かり難いし、地謡が大勢のときは、シテが待ちきれないで扇を定位置に持ってきてしまいますので、適当にならざるを得ませんが、それでも、扇を定位置と一緒に持っていくタイミングを、各自が意識することで、かなり違ってくるのではないかと思います。

その③～退場の仕方

白謡会のしきたりで言いますと、一曲が終わったら、前を向いた状態で、扇を収め、そのあとで右に向きを変えながら左膝を立てて、立ち上がりの準備体制を取ります。入場時とは逆の順（つまり、最後の入場者、最後列右端の人から）立ち上がり、幕若しくは切戸口へと退場します。（会によっては、切戸口に戻る時は左側に向きを変え、左膝を立てる・・・ところもありますが、白謡会の場合は、幕に退場することがほとんどなので、前記のようなルールにしています）

それと、出来ることならば、退場時の姿勢は爽やかなものであって欲しいと思います。足が痺れていたり、謡い疲れているせいか、おおむね、皆さん項垂れてだらだらと、だらしなく、陰気に退場なさいます。

その④～舞台の袖（切戸口の前で）

今回、第二舞台としてはキャパシティを超える参加者数であったことも一因ですが、切戸口附近に待機している地謡希望者の集団の私語がうるさく感じました。ときには、舞台上で謡っている人の謡が聞き取りづらいこともありました。

舞台上上がる前には多少なりとも興奮度が高まりますので、止むを得ない面もありますが、普段から地声の高い人は、意識しておくべきです。

以上の4点、いずれも地頭の権限と責任において取り仕切るべきことであると思いますが、皆の意識が低ければそれにも限界があります。また、若し、地頭が指示を出さなかったら、副地頭が代わって仕切るとか、それもなかったら、気の付いた人が声をかけましょう。

～ 舞台での居住まい（補遺） ～

先日の小欄で、舞台での居住まいについて、集団での留意すべきことを書かせて頂いたところ、これをご覧になった方から、もう一つ、付け加えて欲しいとの声がありました。

その⑤～地謡参加者が舞台上に登場するときの心得

私は、お役で舞台上上がった経験があまりなかったので、気が付かなかったのですが、素謡の場合、先ず、お役の方が舞台上上がり謡い始め、しばらく後、地頭の指示に従って地謡参加者が舞台上に登場するのが通常ですが、この時無造作に舞台に出ていくケースが多いようです。

その結果、お役の謡に集中している人にとっては、突如、地震でも起きたかと思われるような振動に見舞われ、集中力を殺がれてしまいます。（正規の能舞台は吊り構造になっているので、ちょっとした衝撃にも微妙に反応します）

只でさえ、舞台上で緊張しながら謡っているお役の方は、切戸口の前のごわめきが聞こえてき

て、落ち着かなくなっている筈ですから、それに追い打ちをかけるように、どたどたと振動に襲われるのは酷と言えましょう。

玄人だけが地謡に参加するときには、お役の方は地謡が後ろに座ったことに殆ど気づかないことが多いようです。我々アマチュアも、粛々と舞台に登場したいものです。

～ 舞台での居住まい（補遺・2） ～

白謡会においても高齢化は避けられず、ご年配の方が増え続けていますが、この世界では高齢になればなるほど謡に味が出てきます。特に、ご高齢の方が居住まいも美しく謡われますと、心に訴えるものがあり、素晴らしいと思います。

しかし、年齢を重ねるにつれて、膝の故障などから正座が困難になり、数年前からだど記憶していますが、高見台の利用が急速に増え続けています。

高見台では、謡本が斜めに位置し、且つ、床几に腰掛けることで、眼と本の距離が近くなる傾向があるためか、上半身を垂直に保ち易いように思われます。

問題は「扇の扱い」です。高見台を利用する際の扇の扱いについて定めたものがないようですが、概ね、以下のような仕儀が良さそうに思います。

- ① 見台担当者が予め舞台に見台と床几を設える
- ② 高見台利用者は、床几に腰を掛け、謡本を見台に載せる
- ③ 他の者とタイミングを合わせて、扇を腰から抜いて、左手で先端を支え、膝の上に水平に保つ
- ④ 謡う間もそのままの姿勢を保ち続ける
- ⑤ 曲の謡い納めのときは、他の者とタイミングを合わせて、腰に差し、見台から本を取って退場する。

なお、高見台の利用の有無に限らず、舞台に登場する際の本の持ち方についてですが、懐に挟むスタイルと右手に抱えるようにするスタイルと二様あるようですが、私は、後者が望ましいと思います。その方が仕草として自然ですし、和服姿、洋服姿が混在する今の素謡会に馴染むと考えるからです。